

日本学術会議の新たな展望を考える有識者会議（第7回）議事要旨

1. 日 時：平成27年3月20日（金）13：00～13：40

2. 場 所：内閣府本府庁舎3階特別会議室

3. 出席者：

〈大臣〉

山口 俊一 内閣府特命担当大臣（科学技術政策担当）

〈構成員〉

座長 尾池 和夫 京都造形芸術大学学長
座長代理 羽入佐和子 お茶の水女子大学学長
隠岐 さや香 広島大学大学院総合科学研究科准教授
駒井 章治 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授
須藤 亮 株式会社東芝常任顧問
田中 里沙 株式会社宣伝会議取締役副社長兼編集室長
畠中誠二郎 中央大学総合政策学部教授
原山 優子 総合科学技術・イノベーション会議議員
柳澤 秀夫 日本放送協会解説主幹

〈日本学術会議〉

大西 隆 日本学術会議会長

田口 和也 日本学術会議事務局長

〈事務方〉

山田 淳 大臣官房日本学術会議の展望に関する検討室室長

吉住 啓作 大臣官房日本学術会議の展望に関する検討室参事官

山崎 速人 大臣官房日本学術会議の展望に関する検討室参事官

4. 会議次第：

(1) 開会

(2) 報告書案について

(3) 閉会

5. 概要：

(1) 尾池座長から、前回の会議後の報告書案の修正経緯について説明があり、その後、各委員及び日本学術会議会長から発言があった。発言の概要は以下のとおり。

【有識者会議委員】

○ 委員から出た多様な意見をまとめていただいた皆様の御尽力に感謝する。世の中自体が非常に多様化してきており、世の中の要求もどんどん膨らんできている。一方で、厳しい国民の目もあることを考えると、これから学術について考えていく上でも、国

民の目線、国民の皮膚感覚に敏感に反応していくことが強く求められてくるのではないかと思う。そういう目に晒されることは、決してマイナスな面だけではなく、日本学術会議のさらなる発展につながるきっかけとして前向きに捉えられる要素があると思うので、我々の意見が集約された報告書を踏まえて、ますます日本学術会議が発展されることを強く希望する。

- 組織体というものには、環境の変化とともに、また、自己改革というスタンスからも、常に自らを見直しながら改革していくことが求められる。日本学術会議もその例外ではない。その意味で、日本学術会議が、さらなる活動の進展に向けて、内部の構成員がフルにその力を発揮できるような組織になっていくことを期待する。
- 尾池座長の御努力により立派な報告書の案ができた。日本学術会議及びその事務局におかれては、この提言をぜひ実現していただきたい。この後座長が記者会見をされるということだが、必ず聞かれるのが「目玉は何か」という点である。そこは座長にお任せするが、私としては、日本学術会議には、緊急時も含めて適時適切な意見表明を行うとともに、若手の研究者を積極的に登用することが重要だと思う。そのためには、独立性、中立性が大事であるが、その意味では現在の組織は十分独立性が担保されており、特にこれを変える必要はない、というのが私の意見である。
- 今回、自分の専門である広報・コミュニケーションや若手の活躍といった点について、特に関心を高く持って参加させていただいた。報告書では、外から注目されることによってインナー効果も高く表れてくるという点も示唆いただいております、その流れができるのではないかと考えている。私自身も、世の中から抛り所にされるような日本学術会議の存在価値がよく理解できた。今回の発信によって、その認識がさらに強く出てくるとよいのではないかと考えている。尊敬を集めながら親しまれるという在り方を、広報・コミュニケーションによって実現できればと考えている。
- 出した意見は全て反映していただいております、報告書の内容については特にコメントはないが、私の立場上一言申し上げたい。産業界にも立派な科学者は大勢いるので、ぜひそちらの方に一層目を向けていただきたい。また、報告書の中で大事なものは、何といっても、4ページ以降の「日本学術会議に期待される役割」という部分である。
(1)～(4)の役割をしっかりと果たしていただき、国民に分かりやすい日本学術会議になっていただきたい。
- 多様化する中で、様々な価値観を包含でき、かつ内外に向けて発信できる組織であることが大切になってくるのではないかと。動きが見えるようにするという観点で、議論も大事であるが、その実装化をどのように図っていくかも問われてくると思う。そういった中で、若手研究者をうまく使っていただき、シニアの先生方とも一緒に活動していくという形で、日本学術会議を動かしていただければいいのではないかと考える。

ぜひ若手研究者の活用をこれからもより一層進めていただきたい。

- 報告書の取りまとめでは、多様な意見を柔軟に取り入れてくださり、内容について申し上げることはない。「自律性」にこだわった理由について、少し申し上げたい。私は、歴史家として18世紀の科学アカデミーについて研究しているが、王政の下でも、「自律性」を気に掛けることによってアカデミーが発展してきたという背景がある。このため、その言葉を全面に出すような修正意見を出させていただいた。各国アカデミーについては、データ収集等、事務方に大変お世話になり、素晴らしい資料をまとめていただいた。ぜひ研究でも活かさせていただきたい。最後に、歴史家として、こういった機会に関わられたことに大変感謝している。日本学術会議自体に関しては、関わりすぎてしまい中立的な視点を持ってないので、書くことはないだろうが、こういった機会に歴史の一部になれたことを光栄に思う。
- このような形で取りまとめが行われたことの意義は、おそらく日本学術会議そのものの意義と同時に、日本の学術がどのような社会的な位置付けを持ち機能するかを、社会に向けて発信できることではないかと思う。もう1点、社会とのコミュニケーション、社会的要請に応えるということがあるが、そもそも社会的要請とは何か、ということについて考えることが重要である。社会的要請には、短期的な要請だけではなく長期的なものもあるだろうということを、日本学術会議には、今後も念頭に置いていただけることと思う。その意味で、報告書の4ページにある日本学術会議の3つの存在意義が、非常に重要な役割を果たしてくるだろうと思う。今後の日本学術会議の活躍を期待したい。
- この機会に日本の学術の在り方について考え、いろいろと勉強させていただき、大変有難かったと思う。20年前、阪神・淡路大震災が発生した直後、日本学術会議が12名の調査特別委員会を設置して各分野から委員を集め、大論争をしながら報告書を仕上げたことがあった。当時、国会議員が「こんな大変な時に日本学術会議は何の役にも立っていない」と言い出したことがあったが、この特別委員会が非常に早いスピードで議論をして中間報告をまとめていたため、当時の西島（安則）副会長が、「そんなことはない」と国会議員に滔々と述べることができた。何かに迅速に対処することが時には必要だということ、その時に痛切に感じた。当時は、あくまで意見を述べるという立場から具体的な提言を随分と出したが、実際多くの法律ができ、多くのことが実現された。その成果が東日本大震災にも活かされ、情報がきっちり残った。世界の学者に対して、巨大地震がどのようなものか、実態が分かるような記録を正確に残すことができたことは、最近の日本の大きな国際貢献であった。それができたのは、日本学術会議の勧告が実現された結果である。そういった歴史を振り返りながら、私自身もいい勉強をさせていただいた。今回の日本学術会議の在り方の議論では、そういった事例を思い浮かべて吟味してきたが、それがよかったのではないかと思う。委員の皆様もいろいろと調べていただき、事務局も努力をして新しい資料を積み上げて

いただいた。これからも、日本学術会議を外から見続け、活躍を見守っていきたい。

【日本学術会議会長】

- 先日、仙台で「第3回国連防災世界会議」があった。日本学術会議会長として、日本政府主催のイベントの座長を務めたほか、会議本体の科学技術のセッションのアジア代表のスピーカーとして、日本でやってきたことを踏まえて報告した。日本学術会議が防災等に取り組んできたことによる成果を踏まえ、政府としても、日本学術会議にそういった国際的な場で役割を与えることにしたのだろうと思っている。防災に限らず様々なテーマで日本学術会議に期待されている役割は大きいと思うが、一方で、取り組むべきことがはっきり決まっている訳ではなく、そこが政府の中であって他の役所と違うところだと思う。歴史的には、静かに活動してあまりアウトプットを出さなかった時期もあれば、非常に活発に活動していた時期もあった。会員はそれぞれ本職をもっており、ともすれば日本学術会議の活動がおろそかにされてしまうおそれがある。このため、会員になっている6年間は日本学術会議の活動に専念し、自ら取り組むべき課題見つけて設定し真剣に取り組む、という気持ちをもってミッションを果たしていただくようにしないと、停滞しがちな組織であるともいえる。今は活発に活動していると考えているが、それがずっと続くかどうかは分からない。今回の提言を含んだ報告書が日本学術会議の次の発展につながる飛躍台になるのではないかと考えている。日本学術会議では、4月に総会があり、夏には夏季部会があるので、そういった機会に報告書の中身を会員に伝え、皆で理解し、これをベースに新たな取組を始めるという形で、ぜひ活かしていきたいと思っている。

(2) 尾池座長から、報告書案を取りまとめることとしてよろしいか伺いがあり、「異議なし」との声があり了承された。

(3) 取りまとめられた報告書について、尾池座長から山口大臣への手交が行われ、山口大臣から以下概要のとおり発言があった。

- 尾池座長をはじめ有識者会議の委員の皆様におかれては、今年の7月から約8か月間にわたり大変熱心に御議論いただき、感謝。日本学術会議の「わが国の科学者の内外に対する代表する機関」としてのさらなる発展への足がかりとなる、大変よい報告書をまとめていただいた。
- 報告書においては、我が国や人類が抱える諸課題の解決や学術の発展のため求められる役割の発揮に向けて、日本学術会議において今後取り組んでいただくべき課題を、数多く御指摘いただいていると承知している。ぜひ、日本学術会議において、この報告書をしっかりと受け止め、大西会長を中心に、その活動や組織のさらなる改善に向けて主体的に見直しを進めていただきたい。私も、担当大臣として、日本学術会議における主体的な見直しを後押ししていく。

(4) 大西日本学術会議会長から、以下概要のとおり発言があった。

- 8か月ほどの審議を経て、提言を含んだ報告書をまとめていただき、感謝する。日本学術会議について非常に熱心にお考えいただき、御審議いただいた成果であり、非常に重く受け止めている。会議のほとんどの回に参加させていただいたが、日本学術会議が活躍できる既に与えられた条件の下でさらに頑張れ、ということで、その頑張り方について、様々な領域にわたって様々な御示唆をいただいたものと受け止めている。
- 示唆の中には、日本学術会議会則等の規則の変更が必要になるもの、規則の変更なく実施できるもの、様々なものが含まれていると思う。特に、経済界との交流、メディアとの交流に関しては、これまでも一定程度活動してきたものであり、すぐにでも活性化させていきたいと考えている。緊急時における学術からの貢献についても、しっかりした体制をつくっていきたい。一方、例えば連携会員の在り方等については、日本学術会議会則等に規定されているので、幹事会を中心にこれから議論を行い、なるべく早い機会に方向を出して、皆様の御提言に応えていきたい。
- 日本学術会議では、4月に総会が行われるので、その機会にさっそくこの内容について会員に報告し、会員全員がこの内容を理解し、それぞれの部署で改革を進めていけるように図っていきたい。最後に改めて皆様の御尽力、様々な提言に対して感謝申し上げる。

(5) 尾池座長から、会議終了後に記者会見を行い報告書を公表する旨発言があり、有識者会議は終了となった。

<文責 内閣府大臣官房日本学術会議の展望に関する検討室>

※ 速報のため事後修正の可能性あり